

「八重の桜」 散る

本 井 康 博

一日研究会

今日は、新島八重を主題にした「一日研究会」の最終回です。1年目（2012年8月）は、大河ドラマ「八重の桜」（2013年）の放映を控えて、「八重の桜」目当ての八重本が、何冊も出始めたころでした。ので、そのうちから10冊を取り上げ、1冊ずつ、会員が分担して紹介やら分析、検討をいたしました（それぞれの書評報告は、2013年2月刊行の『新島研究』104号に収録済です）。

2年目（2013年8月）は、「八重の桜」放映真っ盛りの夏でした。3人の会員が、会津の視座から八重を取り上げました。当日は、並行してNHKの生放送が学内の寒梅館ハーディーホールで行なわれました。そのために、新島襄夫妻（綾瀬はるかとおダギリジョーのお2人）も来学されました。私自身は、その日、大分県で八重講演をする約束を早くからしておりましたので、ご夫妻に挨拶することも、研究会に参加することも、できませんでした。研究会のほうは、後日、『新島研究』105号（2014年2月）に掲載された報告書で内容が多少、窺えました。

そして3回目は、大河が終わって8か月が経った今日（2014年8月）です。かねてからの予定では、「八重特集を3年連続シリーズで」ということでしたので、これが最終回です。ですが、準備する段階の今年の運営委員会では、「もう特集は、いいのではないか」との声がここに来て、出ました。私もそう思いました。ところが、一方では「総括」を『新島研究』106号（2015年2月刊行予定）に記録として残しておきたい、との強い要望が出て、結局、私に発表のお鉢が廻ってきました。八重に関して複数のスピーカ

ーが論戦する、という特集ではなくて、ただ一篇の「総括」で済ます、という妥協案に落ち着きました。

実は私は、個人的には今から3か月前の5月に、7冊目の八重本、『裏のライフは私のライフー新島襄を語る・別巻四ー』（思文閣出版、2014年5月）を出して、すでに「総括」を済ませております。とくに冒頭的一篇、『『八重の桜』時代考証を終えてー大河ドラマのウラ・オモテー』がそれです。ので、二番煎じというか、「屋上屋を架す」ことにもなりかねない今日の発表は、正直、まことに気が重いのです。

もうひとつ、心にひっかかる要因があります。芸能番組ならいざしらず、歴史研究を本筋とするこの研究会で、ドラマという娯楽番組（エンターテインメント）を歴史的（学術的）な視点から取り上げるだけの意味が、いったいあるだろうか、という素朴な疑問です。事実、この研究会の会員の中にも、「八重は研究に値しない」との辛口の評を下す人がいることも、承知しています。

ドラマの虚構性

前口上はこれくらいにして、総括に入ります。大河ドラマの時代考証をやってみた結果、行き着いた結論は、こうです。「ドラマはドラマだ」という当たり前の命題です。ドラマは作り物、フィクションです。もっと言えば虚構、いやウソです。ウソだから面白いのです。ウソをいかにもっともらしく見せるか、脚本家やディレクター、役者の腕前が問われます。

創作として見た場合、「八重の桜」はとてもよくできたドラマです。このことは、「身内意識」を多少、割り引いても、断言できます。名作でしょう。その反面、史実に基づいた「歴史」ドラマとして見る場合は、問題点を含んでいます。

歴史学（論文や学術書）では、「ねつ造」や「改ざん」、「盗作（コピペ）」は、タブー、いや犯罪とされます。ですが、ドラマの世界では、それほど忌み嫌われているわけじゃありません。むしろ、有効な手段である、当然の手法、と肯定、認知されている場合すらあります。

「八重の桜」の台本をチェックしながら、あるいはそれぞれの場面の時代考証をしながら、「そうか、こう来るか」と脱帽したくなるような文学的、だから非歴史的な発想や展開に何度も直面しました。史実でないことや歴史に反することが、まるで事実のようにもっともらしく仕立て上げられたシーンが、いくつも出てきます。その場合、それらをどう「考証」するか、これは難問です。こうしたシーンは、たいていの場合、ドラマ（物語）としては、史実を羅列したり、そのまま使ったりするよりも、（困ったことに）はるかに面白い展開なんです。

たとえば、離縁後の尚之助・八重が、浅草で再会するシーン。これを見て、号泣する女性がたくさんいました。ドラマ後半のハイライトとなって、おおいに視聴率を稼ぎました。ですが、ふたりが再会したという記録は、今のところ皆無です。つまり創作です。だから、面白いんですね。

「このドラマはフィクションです」

時代考証とは、ドラマの虚構性と歴史学の実証性の狭間で、（オーバーに言えば）身を裂かれるような仕事です。片方の世界だけに軸足を置くことが許されない仕事です。だから、股裂きのような現象は、不可避です。

視聴者の誤解を避けるためには、番組の最後で、「このドラマはフィクションです」と入れてもらうのが、良心的なやり方です。ですが、大河ドラマでは、これは禁句らしいのです。その点、朝の連ドラは、違います。実在の人物を取り上げながらも、この文言が、堂々と使われています。

今年の「花子とアン」で言えば、村岡花子が実際に洗礼を受けた甲府教会は「阿母里基督教会」、通った東洋英和女学校は「私立修和女学校」という名前に替えられています。フィクション性を高めるためです。現実や史実に必要以上に引きずられたくないからです。

これが、大河ドラマとなると、別のようです。同志社女学校を「今出川女学校」とするわけにはまいりません。同様に、山本八重を「桜田ももこ」とか「平野文香」にするなんてことは、どだい無理です。実名は、いじれません。

実名と言え、こういう悩ましい問題もありました。新島の母校、Amherst College をどう呼ぶか、です。世間的には、「アマースト」です。で、NHK が用意した台本でも、そうになっておりました。私は、「同志社ではアモストが主流」と主張して、替えてもらいました。もちろん私は、学内にも「アマースト派」がいらっしゃるのを承知しています。

実名の読み方や呼称ひとつとってみても、大河ドラマは意外に気を使っています。ことしの大河、「軍師官兵衛」で言えば、時代考証者の指導により、秀吉の正妻「ねね」は、「おね」になってますね。

大河の場合、歴史研究の成果が物を言います。だから、純粋なドラマと違って、本物や事実をまったく無視して、自由に空高く飛翔することには、ある程度のブレーキがかかります。そのため、同志社をあまりご存知でない方には、画面に映し出される映像が、そのまま同志社である（に違いない）、と即断、いや誤解されやすいのです。

八重の虚像

八重の扱いもそうです。ドラマをドラマチックにするために、虚構を巧みに駆使します。そうなれば、ストーリーも人物も、必然的に史実とは異なる虚像になります。主役（綾瀬はるか）を毎回、前面に押し出すために、ストーリーが考えられて行きますから、どうしてもフィクションが混ざります。

実際にドラマのどこが虚構か、といったことは、拙著『裏のライフは私のライフ』（2014 年）でいくつかの例をあげて、ネタバレを試みております。浅草での再会のほかにも、顕著な例をあげれば、例の「自責の杖」事件を取り上げた回が、そうです。最初にもらった台本では、この回のテーマは「ウソから出たマコト」でした。

これなど、テーマからして、どことなく意味深長ですね。話自体がウソっぽいことを、NHK 自身が暴露、いや暗示しているような印象さえ受けます。事件の要因を作ったのは八重のウソだ、という設定です。完全なウソです。事件の発生と八重とは、本来、なんの関係もありません。ところが、最終的な台本では、テーマは「ウソから出たマコト」から「八重のはったり」

へと変更されました。つまり、事件は八重の虚言から始まったことを、テーマそのものでアピールしよう、という大胆な発想です。

こうした場合、「NHKの暴走をなぜお前は止めなかったのか」とお叱りを受けないとも限りません。ので、自己弁護しておきます。八重の出番を多くするための虚構、つまりはドラマ性を優先する道を選択したからです。

私がそういう決断を迫られたのには、理由があります。同志社女学校に「小松リツ」という女学生が登場した回（タイトルは「薩摩の女学生」）の時です。あらかじめスタッフから、「架空の生徒を入れますから」との断りの連絡が、ありました。実在しない、創作上の生徒の「時代考証」は、私にはできません。ドラマであることを思い知らされた一瞬でした。

乱暴な言葉を使えば、小松リツに関して、スタッフは「やりたい放題」です。印象的だったのは、リツに対して八重が土下座して謝ったシーンでした。放映後、「やりすぎ」とか、「よくやった」とか、賛否両論が渦巻くという、スタッフの思惑通りの反応が返ってきました。視聴者は、番組の「仕掛け」にみごと乗せられたわけです。ドラマ的には大成功です。なのに、同志社女子大の卒業生の中には、あわてて卒業生名簿を調べた人がいたりした、と聞いています。

小松リツほどの奔放さや徹底さはないものの、八重にしても、虚像である点では、ドラマ上、小松と五十歩百歩です。

八重の実像

「八重の桜」がもたらした最大のメリット（効果）は、なにか。八重はもちろん、川崎尚之助、山本覚馬、新島襄といった名前（ついでに同志社の校名）が全国区になったことです。しかし、一方でその現象を裏から冷静に眺めると、それぞれの虚像が拡大、拡散されたことにほかなりません。つまり、虚像が広がったという点が、大河ドラマが産み出した最大のデメリット（弊害）です。

この点、「花子とアン」は好例です。この朝ドラは、モデルとなった村岡花子の孫（村岡恵理）が書いた『アンのかごー村岡花子の生涯』（2008

年)が原作というか、タネ本です。その原作者は、ドラマを見てこう嘆かれています。

「ドラマですから、フィクションの部分もかなり多く、生い立ちや家庭構成の設定で、誤解が生じる部分もあります」。

「ドラマを鵜呑みにする方はいないと思うのですが、『本当に貧しくて大変だったんですね』とか、『お酒がお好きだったんですか』と言われると、苦笑してしまうことは、もちろんあります」。

花子の実像しか知らない身内は、虚像が一人歩きすることに困惑されていますよね。さらに、貧困や飲酒以上に大きな不満があるといいます。

「特にキリスト教的な部分は、ドラマではほとんど排除されています。例えば、ミッションスクールでの礼拝シーンは、あまりありませんでしたし、教師時代も、本当は山梨英和女学校の先生をしていたのですが、これが〔公立の〕尋常小学校になっています」。

本当は、キリスト教のヒューマニズムなしには村岡花子はありません。それがなくなったら空っぽになってしまうぐらい、キリスト教のヒューマニズムに満ちた人でした。それを宗教色ではない形ででも、表現していただきたいと思います」(以上、村岡恵理「花子とアンとキリスト教」、『キリスト新聞』2014年6月28日)。

原作者が抱く憂慮や失望は、(原作がないとはいえ)八重にもそのまま共通します。当人に関して「誤解が生じる部分」が多々ありますから。それに、「キリスト教のヒューマニズムなしには新島八重はありません」のも同様です。八重の実像を捉えるには、会津魂だけじゃ問題です。

これからの課題

「八重の桜」で広まった八重の虚像を実像に近づけて行く、あるいは、前者と後者を取り換える、それが、研究者や私たちの研究会に残された今後の課題です。「八重の桜」が散った今、落ち穂拾いやら掃除、手入れが待っています。その作業は、およそドラマには成り難い、地味で退屈な仕事です。満開の桜が持っている、人々を惹きつけるような魅力は、そこにはあり

ません。

八重の実像に迫るには、私的には、キリスト教の視点から八重を読み解くことが、どうしても必要だろう、と思います。私自身、すでに試論は手掛けております。「新島八重とキリスト教」と題した小論をすでに3篇、拙著『八重さん、お乗りになりますか』（2012年）で公表しております。

「八重の桜」では、キリスト教のことは、あまり触れられませんでした。そこは、公共放送であるNHKの限界でもあります。ですが、当初に私が想定した以上に、NHKは宗教色を出しました。ギリギリの線、という程度にしろ、最近のドラマの主演（新島八重、黒田官兵衛、村岡花子）が、そろってクリスチャン（キリシタン）であることに、一部の「世論」は快く思っておりません。「NHKは、外国にころを売ったのか」との批判が、時には寄せられたりします。

宗教性を始めとして、ドラマで欠如した諸側面は、今後、積極的に発掘や調査をしなければいけません。ドラマで拡散された虚像を修正、補訂するだけでなく、実像を鮮明に前面に打ち出して行く必要があります。この2、3年で八重本が3ケタになるほど誕生したにもかかわらず、学内関係者の取り組みは、少数の例外を除けば、全体的には実にお寒い状況でした。

皆さま、八重の実像を鮮明にするために八重研究にいつそう尽力していただきたい、と願います。史実に基づく八重の「全体像」をぜひとも構築しなければなりません。「発破をかける」形のアピールを締めにして、私なりの「八重の桜」総括といたします。

（2014年8月9日、同志社・新島研究会）

追記

今年8月の研究会が終わった2か月後に、八重と同志社に関する記事が、突然、週刊誌に出ました。タイトルは「看護学部新設の同志社で新島八重を巡る内輪もめ」という物騒なものです（『週刊ダイヤモンド』56頁、2014年10月18日号）。新聞広告に釣られて、さっそく読んでみました。たしか、広告では、「内紛の火種」とありましたが、本文では、「内輪もめ」に変わっていました。リードの部分は、次の通りです。

「医学部設立への布石なのか、同志社女子大学が二〇一五年に看護学部の開設を予定する。学生人気は期待できそうだが、そのやり口に同志社内部から疑問の声が上がっている」。

これに続く本文では、同志社女子大学は HP で、看護学部の受験生に向けて、八重を「学びのルーツ」と位置づけている。このことに対して、「史実と異なると指摘する」「同志社関係者」がいるので、その声を紹介する、というのです。

「新島襄が同志社病院、京都看護病学校〔看病婦学校のミス・本井〕を設立したのは事実だが、八重が関わったという資料はない。また、八重は日露戦争などで従軍看護婦として活躍したが、それは夫が亡くなって同志社との関係を断ってからのこと。にもかかわらず、一部の募集資料にはまるで八重の遺志を継いで看護学部をつくったと思わせるようなものがある。史実を無視して強引にこじつけている」。

「学内では医学部を本当につくる必要があるのかという意見が持ち上がっているが、総長派〔推進派〕はとにかく“新島襄の夢をかなえる”の一点張りで、医学部設立を水面下で進めている」。

「八重をシンボルにした看護学部設立はその布石だった。恥ずかしい話だが今、同志社には史実をねじ曲げてでも、八重をとことん利用しようという風潮がある」というのです。

以上が、どうやら内部の「同志社関係者」の発言のようです。記事の最後は、記者によって次のように締めくくられています。

「『虚言をいふ事はなりませぬ』という一節もある会津藩の『什の掟』をそらんじていたという新島八重は、この騒動をどう思うのか」。

同志社をすでに退職している私は、情報不足のため、学園の「内乱」のことは、この記事によって初めて知りました。「八重の桜」が、学園の「内紛の火種」になっているとの報道は、まったく想定外のことで、初耳でした。だから、「同志社には史実をねじ曲げてでも、八重をとことん利用しようという風潮がある」との指摘に対しても、資料や材料は何も持ち合わせていません。だから、私には正当な判断が下せません。ただ思うのは、そうした風潮が現実に関内にあるならば、もう少し八重への関心や研究が高まってよ

かったのに、と思わざるをえません。

研究領域に特化して、改めて思うのは、八重に限らず、事実の牽強附会は避けるべし、との自戒です。「史実をねじ曲げる」ことが許されるのは、ドラマや小説のジャンルであって、研究領域ではないことをこの機会に胸に刻むべきです。研究会の会員としては、史実や実像を追求することに、いっそう尽力しなければ、と改めて決意させられました。

(2014 年 10 月 23 日)